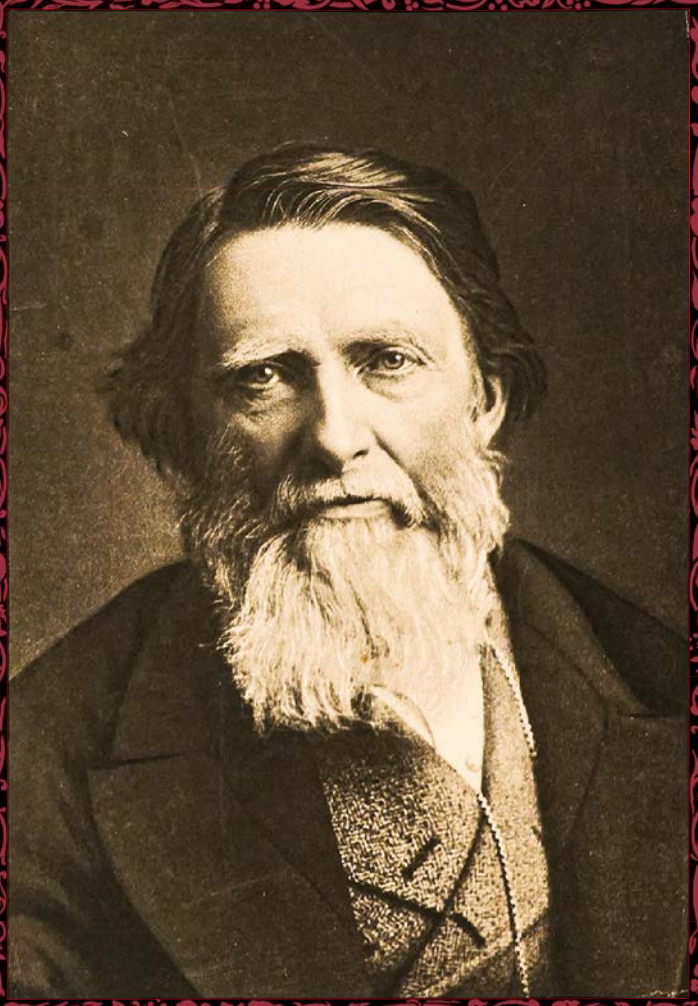
主催：大阪大学中之島芸術センター

Organised by Osaka University Nakanoshima Art Center

今に生きるラスキン

大阪ラスキン・モリスセンター収蔵品による企画展

Exhibition Featuring the Collection of the Ruskin & Morris Center of Osaka



2024. 9.20 |Fri| → 10.20 |Sun| open 10:30～17:00

大阪大学中之島センター 4階展示室

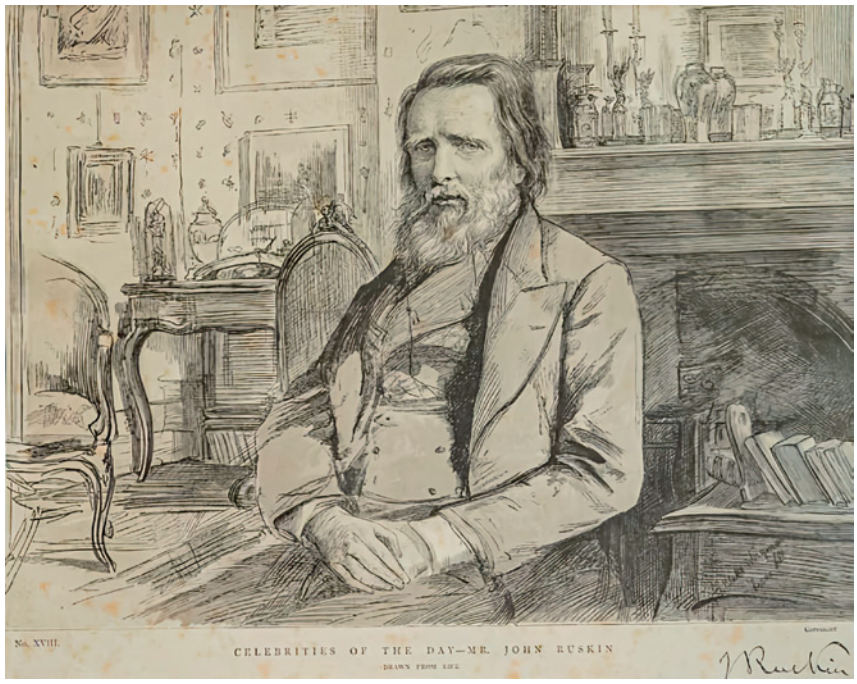
4th Floor Gallery, Osaka University Nakanoshima Center

Ruskin Alive

入場無料 Admission: Free

協力：大阪ラスキン・モリスセンター、studio-L

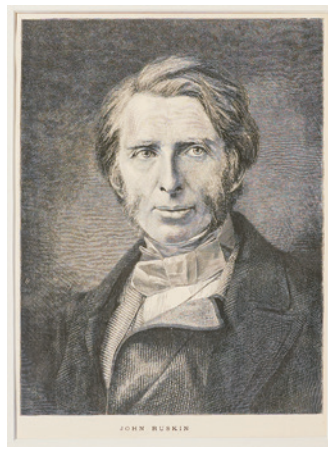
In Cooperation with The Ruskin & Morris Center of Osaka, studio-L



T・B・ワーグマン原画《今日の著名人――ジョン・ラスキン氏》
（雑誌『グラフィック』1886年4月3日付の挿絵）、部分、リトグラフ

ジョン・ラスキンは、美術家・美術批評家であるとともに社会福祉活動に力を注いだ人物です。本展覧会では、大阪ラスキン・モリスセンターの収蔵資料をとおして、ラスキンの人となりや、芸術への眼ざしや、社会への関わりや、環境保護への足がかりを明らかにしたいと思います。展覧会ではさらに、ラスキンの設立による聖ジョージ・ギルドや、日本のstudio-Lの取り組みに注目して、ラスキンの思想がどのように社会活動へと波及してきたかを合わせて紹介します。大阪ラスキン・モリスセンターは、2006年に露木紀夫氏の私設資料館として設立され、2019年に一般財団法人となり、studio-Lと共同で多くの人々に開かれた施設として再出発しようとしています。ラスキンの理想を具現化しようとする取り組みをとおして、今に生きるラスキンを浮かび上がらせます。

ジョージ・リッチモンド原画、フランシス・ホル版刻
《ジョン・ラスキン》1861年
銅版画



ハインリヒ・ウールリヒ版刻
《ジョン・ラスキン》1879年以降
木版

アドリアーノ・チェチオーニ
《時の人、No. 40「理想の実現」》
（雑誌『ヴァニティー・フェア』1872年2月17日付の挿絵）
リトグラフ

第1部
ラスキン多面体

1819年ロンドンに生まれたラスキンは、6歳で初めてヨーロッパ大陸を旅し、12歳で素描を学び始めた。1832年J·M·W·ターナーの絵画世界に出会い、翌年アルプスの山嶺の美を知る。1837年オックスフォード大学に入学したラスキンは、『近代画家論』(第1巻、1843年)で美術批評家として登場した。鋭い観察眼に支えられたラスキンの批評は、芸術が生まれる場としての社会や自然環境それ自体にまで及んでいく。1870年代には社会福祉や環境保護の実践にも乗り出し、人間の生きかたを問い直した。

1-1. 美術批評家ラスキン

J·M·W·ターナーとラファエル前派兄弟団の画家たちを擁護し、J·M·ホイッスラーを酷評したことでつとに知られるラスキンは、15世紀イタリアの画家たちを再発見し、ゴシック建築を賛美した美術批評家でもある。その関心は、美術批評のみならず美術教育にも向かった。1854年ロンドンの労働者大学で素描を教え始め、1870年からオックスフォード大学初代スレイド美術教授として講義を行い、また同大学内に素描学校を開設した。こうした教育の現場から生まれた著作が『素描の基礎』(1857年)や『美術講義』(1870年)である。

No.18

1-2. 社会改良家ラスキン

ラスキンの社会思想の源流は1840年代に訪れたアルプスにある。そこには美しい山岳風景とは対照的に、貧困と病苦にあえぐ農民の生活があった。こうした社会的な関心が実践に移されるのは1870年代、北部イングランドの工業都市シェフィールドに開設した聖ジョージ·ギルドと聖ジョージ美術館においてである。産業資本主義の負の側面を指摘したラスキンの社会思想とその実践は、アーツ·アンド·クラフツ運動やセツルメント運動、その後のギルド社会主義などに影響を与えた。

1-3. 環境保護家ラスキン

「澄んだ空気、水、大地」の重要性を『フォルス·クラヴィゲラ』(第5書簡、1871年)で訴えたラスキンは、環境保護の先駆者でもある。1870年代にはイングランド北西部、湖水地方での鉄道延伸に反対し、1884年の講演「19世紀の嵐雲」では、当時の大気の状態の変化を工場等の煤煙による大気汚染と結びつける先見的な視点を打ち出した。その環境思想は1895年のナショナル·トラスト設立の淵源でもある。気候変動がもたらす種々の問題に直面する現代においてこそ新たな意義を帯びる多面体ラスキンの一面である。

No.2

No.3

No.5

No.4

No.6

第2部

聖ジョージ・ギルド

芸術の衰退を、汚染と搾取という自然と社会のモラル低下の象徴ととらえたラスキンは、経済へと議論の幅を広げ、1860年から『コーンヒル・マガジン』にて「この最後の者にも」の連載を始めた。人々の生にこそ富の源泉を見る彼の新しい経済論は当時非難されたものの、やがて市場経済と大都市中心の社会に対して、中世に見られた農村社会を理想とするプロジェクトへと発展する。こうして1870年代後半に生まれたのが聖ジョージ・ギルドである。ギルドはラスキンの思想を土台として、現在も活動を続けている。

2-1. ギルドの文化活動

ギルドの支柱の一つが芸術を通した教育である。1875年にシェフィールドのウォークリーに建てられたのが、最初のギルドのミュージアムであり、地元労働者コミュニティのハブとして機能した。集められた収蔵品は、中世写本や、鉱物標本、巨匠たちの絵画の模写や、彫刻、建築のスケッチなど多岐にわたり、ラスキンの芸術論の基礎をなす自然科学的な関心や、教育思想がここでも脈打っている。現在、シェフィールド・ミュージアム・トラストのミレニアム・ギャラリーにてこれらのラスキン・コレクションを見ることができる。

聖ジョージ・ギルド主催の糸紡ぎワークショップ（ラスキン・ランドにて）
Spinning Workshop at Ruskin Land © The Guild of St George

2-2. ギルドの社会活動

二番目の柱は伝統工芸の復興と保護による地域再生である。大都市集中の工業化は、地域の特性を奪い荒廃を招いた。ラスキンは、地方の材料を使用した手仕事を支援することで、コミュニティの再生をめざした。マン島のラクシーでは地元の毛織業をサポートし、1881年の聖ジョージ毛織工場設立につなげた。また、湖水地方のラングデールの手紡ぎ・手織り製品は、ラスキン・リネンと命名され女性たちのエンパワメントにもつながった。作る喜びを土台とした目に見える消費は、ウィリアム・モリスの労働観にもつながっている。

2-3. ギルドの環境活動

ラスキンはギルドの最初のマスターとして、志を同じくする仲間たち(コンパニオン)を募り、共に心身の健康と幸福を増進するコミュニティ創設を目指した。1877年にラスキンがシェフィールド近くに土地を購入し、聖ジョージ農園を立ち上げ協働農業の取り組みを開始したことを皮切りに、ラスキンのみならず、コンパニオンや後続のマスターによって寄付されたり購入されたりした土地は、今日に至るまで環境保護活動に貢献している。そして現在、気候変動の阻止はギルドの中心的な活動の一つとなっている。

No.7–16

No.17

No.18

No.19

No.20

第3部

コミュニティ実践

大阪ラスキン・モリスセンターは、2006年に露木紀夫の私設資料館として設立され、2019年に一般財団法人となってstudio-Lと共同で、多くの人々に開かれた施設として再出発しようとしている。大阪府能勢町にあるセンターは、ジョン・ラスキンや、彼の思想に影響を受けたウィリアム・モリスに関係する資料を管理している。これらの資料は、露木が30年以上かけて各国の古書店から集めたものである。センターは、貴重な資料を学術研究に役立てるとともに、ラスキンに学びながら地域の生活を豊かにすることを目的として活動をおこなっている。

3-1. 露木コレクション

露木紀夫は、川勝平太著『日本文明と近代西洋』(1991年)で紹介されていたラスキンの経済学に感銘を受け、ラスキン関連資料の収集と研究を始める。収集した資料には、ラスキン自身による著作『近代画家論』(全5巻)の初版本や『美術講義』の校正原本、200通におよぶ自筆書簡、ラスキンが描いた水彩画などがある。センターでは、これらの資料を保存管理しており、研究のための活用のほか、ラスキンの思想の普及に向けての活用も考えている。

大阪ラスキン・モリスセンターの書庫
Library of the Ruskin & Morris Center of Osaka

3-2. みんなでつくる

大阪ラスキン・モリスセンターでは、将来の社会のありかたに共感する者たちがそれぞれのできることを考えながら活動している。現在、施設の改修作業や蔵書の整理作業なども、地域住民や学生、研究者などの多くの有志と一緒に進めている。ラスキンは、職工たちが共にものをつくる喜びを感じながら生み出したものとして、ゴシック建築を賛美した。センターの運営は、多くの仲間たちが集い活動を楽しむことを通して、ラスキンの理想を体現しているといえよう。

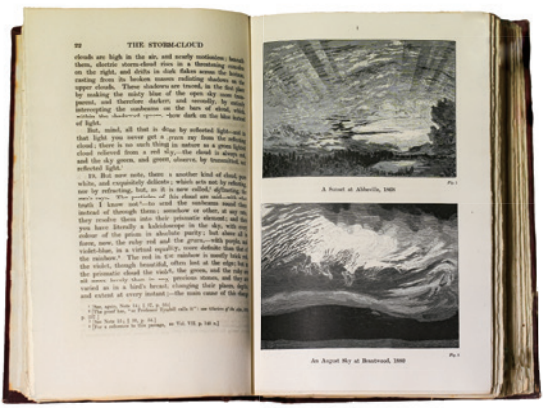
3-3. 自然にいだかれて

ラスキンが晩年を過ごしたコニストン湖のほとりにある村、ブラントウッドは、美しい自然の景色が広がる地域である。この土地でラスキンは、地域の人たちに向けて講義をおこなったり、働きかたを一緒に考えたりするなど、人々と積極的に交流していたという。能勢町もまた、里山風景が広がる自然豊かな地域である。センターもまた、自然に囲まれた場所に人々が集い、一緒に語り合い、学び合えるような交流拠点となってほしいと願っている。

No.27

No.23

No.26



No.29

Exhibition Featuring the Collection of the Ruskin & Morris Center of Osaka

Ruskin Alive

John Ruskin was not only an artist and art critic, but also a social reformer. This exhibition aims to reveal Ruskin's life and thoughts, his aesthetic vision, his social involvement, and his efforts to protect the environment, using the collection of the Ruskin & Morris Center of Osaka. The exhibition also highlights the influence and legacy of Ruskin's ideas on social and educational activities, focusing on the projects of the Guild of St George in the UK and the initiatives of studio-L in Japan. The Ruskin & Morris Center of Osaka was founded by Norio Tsuyuki as private archives in 2006 and became a general incorporated foundation in 2019. Now it is about to be re-launched as a facility open to members of the public in collaboration with studio-L. By attempting to embody Ruskin's ideals, the exhibition will shed light on the relevance of Ruskin to our lives.

Part 1: The Ruskin Polygon

Born in London in 1819, Ruskin made his first visit to Europe at the age of six and started drawing lessons at twelve. The precocious child encountered the pictorial beauty of J. M. W. Turner in 1832 and the natural beauty of the Alpine scenery in the following year. After entering the University of Oxford in 1837, Ruskin marked his debut as an art critic with the first volume of *Modern Painters* published in 1843. Guided by his keen, observant eye, his critical attention turned to Victorian natural and social environments as the cradle of artistic creation. In the 1870s, he embarked on practical efforts to enhance social welfare and environmental conservation, always searching for ideal ways of life and living.

1-1. Ruskin the Art Critic

Ruskin is particularly well known for his advocacy of J. M. W. Turner and the Pre-Raphaelites as well as his harsh criticism of J. M. Whistler. The art critic also rediscovered 15th-century Italian painters and ardently admired Gothic architecture. Devoting his attention not only to art criticism but to art education, he began in 1854 to teach a drawing class at the Working Men's College in London. In 1870 he delivered a series of inaugural lectures as the first Slade Professor of Fine Art at Oxford, founding a drawing school in the University in the following year. These educational endeavours brought about two of his seminal works: *The Elements of Drawing* (1857) and *Lectures on Art* (1870).

1-2. Ruskin the Social Reformer

The origins of Ruskin's social ideas can be traced back to his travels to the Alps in the 1840s. In a sharp contrast to the beauty of Alpine mountains, he saw the poverty and illness that plagued the life of local peasants. It was in the 1870s that this Victorian thinker put his ideas into practice at the Guild of St George and the St George's Museum, both founded in Sheffield, an industrial town located in the North of England. The social ideas and practices of Ruskin, who pointed to negative aspects of industrial capitalism, had an extensive influence on the Arts and Crafts movement, the settlement movement, and guild socialism.

1-3. Ruskin the Environmentalist

Essential to life are 'Pure Air, Water, and Earth.' – Ruskin, a pioneer environmentalist, wrote in Letter 5 of *Fors Clavigera* in 1871. In the 1870s he protested against the extension of railways into the Lake District, and in his 1884 lectures 'The Storm-Cloud of the Nineteenth Century', he presciently related the atmospheric changes of the time to air pollution by industrial smoke. His profound ideas concerning the natural environment inspired the establishment of the National Trust in 1895. Ruskin the environmentalist represents another side of the Ruskin polygon, which takes on a new significance in this era of climate change and environmental issues.

Part 2: Guild of St George

Ruskin's theory of art asserted that the decline of art symbolises the decline of nature and of social morals. He extended this argument to political economy, and in 1860, started a series of essays named 'Unto this Last' in *Cornhill Magazine*. Although his new economic theory that people's lives should be the source of wealth was condemned by his contemporaries, it eventually evolved into a project to revive the rural society of the Middle Ages, as opposed to the mercantile economy and metropolitan-centred society. Thus was born the St George's Guild in the late 1870s. Today, through its various activities, it is keeping Ruskin's torch alight.

2-1. Cultural Activities

One of the main pillars of Guild's activities is education through art. The first Guild Museum was established in Walkley, Sheffield, in 1875 as a community hub for the workers of the city. The collection includes medieval manuscripts, mineral specimens, copies of old masters' paintings, sculptures, and architectural sketches and drawings. The natural scientific interests and educational ideals which formed the essence of Ruskin's artistic theory are clearly visible here. The Ruskin Collection can currently be viewed in the Millennium Gallery, part of the Sheffield Museums Trust.

2-2. Community Work

The second pillar is regional regeneration through the revival and protection of traditional handicrafts. Industrialisation has deprived rural communities of their inherent value and caused environmental devastation. Ruskin aimed to revitalise communities by supporting handicrafts using local materials. In Laxey on the Isle of Man, he helped to revive the local woollen industry, which led to the founding of St George's Mills in 1881. Also, the promotion of hand-spinning and hand-weaving in Langdale led to the empowerment of local women. Healthy consumption based on the joy of making is also linked to William Morris's labour ethics.

2-3. Environmental Initiatives

Ruskin became the first Master of the Guild and recruited like-minded individuals, known as Companions. They aimed to create a community which would promote physical and mental health, and the well-being of the members. Ruskin first purchased land near Sheffield in 1877 and initiated co-operative farming as St George's Farm. Pieces of land purchased and donated not only by Ruskin but also by other Companions and subsequent Masters have become focal points of the environmental movement. Today, addressing climate change stands as one of the Guild's core social activities.

Part 3: Community Design

The Ruskin & Morris Center of Osaka was founded in 2006 as private archives by Norio Tsuyuki, and transitioned

into a general incorporated foundation in 2019. In collaboration with studio-L, the Ruskin & Morris Center of Osaka is now re-launching as a public facility. Situated in the town of Nose, the Center manages precious collection associated with John Ruskin and William Morris, the latter of whom was influenced by Ruskin's thought. Over a span of 30 years, Tsuyuki collected these materials from antiquarian booksellers overseas. The goal of the Center is to utilise those material for academic research and to serve as a cultural hub enriching the local community.

3-1. Tsuyuki Collection

Impressed by Ruskin's economic theories, as introduced in the 1991 treatise *Nihon-Bunmei to Kindai-Seiyō* [Japanese civilisation and the modern West] by Heita Kawakatsu, Norio Tsuyuki started collecting Ruskinalia and conducting research on him. Tsuyuki Collection comprises the first edition of *Modern Painters* (5 vols), a printed proof of *Lectures on Art* with Ruskin's annotations, approximately 200 autograph letters, and watercolours by Ruskin. The Ruskin & Morris Center of Osaka preserves and manages these materials, and intends to utilise them for research purposes as well as the dissemination of Ruskin's ideas.

3-2. Do It Together

At the Ruskin & Morris Center of Osaka those who share the common vision for an ideal future society come together and actively explore ways in which each can contribute. Currently, renovations of the facilities and archive collections are undertaken by volunteers including local residents, students, and researchers. Ruskin praised Gothic architecture, in which craftsmen felt joy in collaboration. The Ruskin & Morris Center embodies Ruskin' s concept of fellowship by hosting various programmes.

3-3. Embraced by Nature

Ruskin spent his last years in Brantwood, on the shore of Coniston Water, surrounded by beautiful natural scenery. Ruskin was actively engaged with the local community interacting with residents though lectures and discussions on various topics, including the value of labour. The town of Nose, home to the Ruskin & Morris Center of Osaka, is also blessed with a beautiful natural environment. Our objective is to make the Center a hub where people can convene, converse, and learn amidst the beauty of nature.

作品解説

No. 1 ‖ サミュエル・ロジャーズ著、J・M・W・ターナー、トマス・ストサード原画『イタリア――詩集』、T・カデル社、E・モクソン社、1830年。1832年、ラスキン13歳の誕生日に贈られた書が、イギリスの詩人サミュエル・ロジャーズ（1763～1855）の詩集『イタリア』であった。この1830年版にはJ・M・W・ターナー（1775～1851）とトマス・ストサード（1755～1834）の原画に基づく挿絵版画が載っており、ラスキンはこの紙上でターナーの絵画世界に出会った。展示の挿絵は、ターナー原画、エドワード・グドール版刻の《ヴェネツィア》。本書は小説家チャールズ・ディケンズの旧蔵書である。

No. 2 ‖ ジョン・ラスキン著『サルセットとエレファンタ』、J・ヴィンセント社、1839年。オックスフォード大学在学中の1839年、ラスキンは念願のニューディゲイト賞を受賞した。その受賞作が、インドの二つの島の情景を詠った詩「サルセットとエレファンタ」である。この賞では与えられた題と長さでの詩作が求められた。本書は、ラスキンが同年6月12日に大学講堂で受賞作を朗読する際に配られた小冊子である。朗読後に賞を手渡したのは、桂冠詩人ウィリアム・ワーズワス（1770～1850）であった。

No. 3 ‖「ジョン・ラスキン発サミュエル・パーマー宛書簡」1844年消印。ジョン・ラスキン《葉の素描》1844年。19世紀前半のイギリスで活動した芸術家グループ「古代人たち」の一人サミュエル・パーマー（1805～1881）とラスキンとの親しい交流を示す貴重な書簡である。封筒の消印から1844年夏のフランス・スイス滞在から帰国後にしたためられた手紙であることがわかる。シャモニー滞在中にアルプスの植物を蒐集したラスキンは、アルパインローズの葉をパーマーに送り、同封の素描と合わせてその構造について説明している。なお素描の下の'Alpine Rose' 'Mr. Ruskin'の文字はラスキンの筆跡ではない。

No. 4 ‖ ジョン・ラスキン《シャフハウゼンの風景》1863年あるいは1866年。スイス北部のシャフハウゼンにあるライン滝は、150メートルもの横幅を誇るヨーロッパ最大の瀑布である。ラスキンは1833年にこの有名な景勝地を訪れて以来、1866年まで計6回足を運んだ。描かれているのはライン滝の横幅3分の1ほどで、流れ落ちる滝のしぶきが白の水彩で表されている。『ラスキン全集』（ライブラリー版第38巻）の素描目録には掲載のない貴重な一枚である。ラスキン晩年の秘書サラ・アンダーソン旧蔵。

No. 5 ‖ ジョン・ラスキン著・画《植物解剖図》制作年不詳。花びらやがく、雌しべなど花の各部分が描かれ、その説明として「心皮は、子房と花柱と4つの柱頭から成る。心皮の集まりを雌しべと呼ぶ」と書かれている。ラスキンはイギリスやアルプスの野の花を研究し、『プロセルピナ』（1875～1886年）にまとめた。同書第1巻4章「花」では、この素描に挙がっている花の構成要素のほか、雄しべや管状花、苞葉などにも言及している。ラスキンの植物学への関心と知識が窺われる素描である。なお、右下の'Drawing & explanation by John Ruskin'はラスキンの筆跡ではない。

No. 6 ‖ ジョン・ラスキン著、ウィリアム・モリス序文『ゴシックの本質』、ケルムスコット・プレス（印刷）、ジョージ・アレン社（出版）、1892年。ラスキン著『ヴェネツィアの石』第2巻（初版1853年）の第6章「ゴシックの本質」は、ウィリアム・モリスやアーツ・アンド・クラフツ運動の精神的支柱となった。中世の美術に職人の自由な創造性の発露と労働の喜びを見出したラスキンは、産業革命後の機械化による労働の変化、分業による人間の断片化に警告を発した。本書は、1886年版にモリスが序文を付し、自らの私家版印刷所ケルムスコット・プレスで印刷した500部中の一冊である。

No. 7-16 ‖ ジョン・ラスキン著・原画、トマス・ルプトンほか版刻『ヴェネツィア建築図集』、ジョージ・アレン社、1887年。ラスキンは『ヴェネツィアの石』（全3巻、初版1851～53年）の読者が参照できるように、ヴェネツィアの建築物のディテールを写した版画15枚を『ヴェネツィア建築図集』（初版1851年）として刊行した。本書はその第2版である。原画はラスキンが、版刻はトマス・ルプトン（1791～1873）などヴィクトリア朝の主要な版画家が手掛けている。各版画にはラスキンによる解説が付く。

No. 17 ‖ ジョン・ラスキン著『近代画家論』第3巻、スミス・エルダー社、1856年。ラスキンの主著の一つ『近代画家論』の初版。J・M・W・ターナーの風景画を擁護する目的で書き始められた本書第3巻には、第11章「風景画の新しさについて」、第12章「感傷的虚偽について」などの重要な章が含まれる。巻頭の扉絵はラスキン原画、J・C・アーミテージ版刻《湖、大地、雲（コモ湖近傍）》。ラスキンが自著に初めて用いた扉絵で、イタリア北部コモ湖の夕景である。版画家のアーミテージはターナー作品の版刻でも知られる。

No. 18 ‖ ジョン・ラスキン著『美術講義』（初版1870年）の校正原本、ジョージ・アレン社、新改訂版と1910年版。1869年にオックスフォード大学の初代スレイド美術教授に就任したラス

キンは翌年、最初の講義を行った。『美術講義』はその講義録である。本書は、第4版にあたる新改訂版（1887年）と1910年版の校正原本に、新改訂版「序文」の自筆原稿と出版社宛ての2通の書簡（1887年11月15日付と1888年1月10日付）を綴じ込んで製本された一冊である。ジョージ・アレン社による装丁ではない（S・ワイルドマン名誉教授による教示）。

No.19 ‖ ジョン・ラスキン著「『ジョン・エヴァレット・ミレイ主要作品解説』序文の自筆原稿」1886年1月22日付。1886年、ロンドンのグロヴナー・ギャラリーで画家ジョン・エヴァレット・ミレイ（1829～1896）の展覧会が開催され、油彩画・素描など計162点が展示された。ラスキンは1851年と1854年の『タイムズ』紙上で、ミレイやホルマン・ハントらラファエル前派兄弟団の画家たちの作品を擁護していた。展示は、この展覧会のカタログ『ジョン・エヴァレット・ミレイ主要作品解説』にラスキンが寄せた「序文」の自筆原稿である。

No. 20 ‖ 「ジョン・ラスキン発クラークソン・スタンフィールド宛書簡」1859年8月22日付。ヨーロッパを旅行中のラスキンが、イギリスの風景画家クラークソン・スタンフィールド（1793～1867）に宛てた手紙。描かれているのはシャフハウゼンのライン滝である。ほとばしる水流の向こうに鉄道橋が、右岸の上方にラウフェン城が見える。その下には「トンネル！」の書き込みがある。ラスキンはこの書簡の中で、川や湖に掛けられた鉄橋を走る蒸気機関車によって水質が汚染され、透明度が下がっていると指摘している。

No. 21 ‖ ジョン・ラスキン著『この最後の者にも』、スミス・エルダー社、1862年。ラスキンの社会批評の代表作『この最後の者にも』は、1860年に『コーンヒル・マガジン』に連載された論文4本をまとめた一書として1862年に刊行された。本書はその初版である。富める者の道義的な義務として貧しき者への富の再分配を説いた同論文は発表当初、激しい非難を浴びた。「生なくして富なし」の言葉でも知られ、その後の世界の社会運動家――モリス、トルストイ、ガンジー、賀川豊彦ら――に影響を与えた。

No. 22 ‖ アドリアーノ・チェチオーニ《時の人、No. 40「理想の実現」》（雑誌『ヴァニティー・フェア』の挿絵版画）、1872年2月17日掲載、リトグラフ。1872年、イギリスの週刊誌『ヴァニティー・フェア』の連載「時の人」に登場したラスキンの風刺画である。この連載には、詩人アルフレッド・テニスンや画家ジョン・エヴァレット・ミレイ、進化論者チャールズ・ダーウィンらの風刺画も掲載されている。版画の裏面には、前年1871年にラスキンが巨額の寄付をして聖ジョージ基金を設立したことが書かれていて、時流に逆らう「理想の実現」を説く者として揶揄されている。

No. 23 ‖ ジョン・ラスキン著、E・T・クック、A・ウェダバーン編。『聖ジョージ・ギルドと聖ジョージ美術館（ラスキン全集ライブラリー版第30巻）、ジョージ・アレン社、ロングマンズ・グリーン社、1907年。ラスキン全集ライブラリー版（全39巻）はラスキンの著作の定本である。ロンドンの労働者大学でのラスキンの弟子ジョージ・アレン（1832～1907）が立ち上げた出版社が1903～ 1912年に2062部刊行した。第30巻には、聖ジョージ・ギルドの設立趣意書や財務報告、聖ジョージ美術館の所蔵品目録等の記録が載っている。編者らは、1884年にロンドンに設立された最初のセツルメント「トインビー・ホール」の草創期を支えたメンバーでもある。

No. 24 ‖ J・H・ホワイトハウス編『聖ジョージ――バーミンガム・ラスキン協会雑誌』創刊号、ラスキン協会、エリオット・ストック社、1898年。1896年に設立されたバーミンガム・ラスキン協会の年刊誌の創刊号。イギリスでは、1879年創設のマンチェスター・ラスキン協会を皮切りに、リヴァプールやバーミンガムなどにラスキン協会が開設された。編者のジョン・ハワード・ホワイトハウス（1873～1955）は、のちに世界有数のラスキン・コレクションとなる「ホワイトハウス・コレクション」（現、英ランカスター大学蔵）を形成した。イギリスでのラスキン受容史上、重要な教育者である。

No. 25 ‖ ジョン・ラスキン著『フォルス・クラヴィゲラ――イギリスの労働者への書簡集』第1巻、ジョージ・アレン社、1871年。『フォルス・クラヴィゲラ』は、ラスキンが1871～1884年にイギリスの労働者に宛てた96通の公開書簡集である。本書はその第1巻の初版で12通から成る。第5書簡（1871年5月）には、聖ジョージ・ギルド設立のための協力を呼びかける一文や、「澄んだ空気、水、大地」の重要性を説く一節など、その後のラスキンの社会実践、環境思想の萌芽を見ることができる。J・M・ホイッスラーとの裁判の引き金となったのは、第79書簡（1877年7月）掲載の批評である。

No. 26右 ‖ 「ジョン・ラスキン発ロバート・チェスター宛書簡」1871年11月22日付（日付は後代の加筆か）。ロバート・チェスターは、ラスキンの著書を出版していたスミス・エルダー社の印刷所の校正者（実質的な編集者の一人）で、当初は月刊の小冊子であった『フォルス・クラヴィゲラ――イギリスの労働者への書簡集』の初期の号を担当していた（S・ワイルドマン名誉教授による教示）。1871年8月の「第8書簡」にラスキンはこう書いている。「よき友ロバート・チェスター氏の細やかな校正のおかげで、多くの重大なミスを防ぐことができた」

No. 26左 ‖ サミュエル・ホリヤー版刻《ラスキン氏の肖像》1867年以降、エッチング。エリオット＆フライ社撮影の1867年の肖像写真に基づく複製版画。ラスキン48歳ごろの横顔の肖像である。『フォルス・クラヴィゲラ』（ラスキン全集第27巻）の扉絵にも、同じ肖像写真に基づく複製版画が使われている。

No. 27 ‖ ジョン・ラスキン著、E・T・クック、A・ウェダバーン編『鷲の巣（ラスキン全集ライブラリー版第22巻）、ジョージ・アレン社、ロングマンズ・グリーン社、1906年。ラスキン原画《カワセミ》（挿絵XXII）、フォトグラビュール。1872年、ラスキンは自然科学と美術との関係についてオックスフォード大学で講じた。『鷲の巣』はその講義録で、19世紀の科学の発展についてこう述べている。「発明の誤用によって、我われは永久に歴史に記憶されるだろう。種の擁護または否定における我われの才は、ヨーロッパの文明国で希少種の鳥や花が殺されている事実の前に軽んじられるだろう。〔中略〕そして我われの機械仕掛けは、ギロチンの時代よりも忌まわしい機関銃の時代を到来させるだろう」

No. 28 ‖ 「ジョン・ラスキン発ダグラス・フレッシュフィールド宛書簡」1878年。登山家で法律家のダグラス・フレッシュフィールド（1845～1934）は当時、『アルパイン・ジャーナル』の編集者であった。アルプスの氷河の力強い作用は地質学に造詣の深いラスキンを魅了し続けた。スイスの風景画家アレクサンドル・カラーム（1810～1864）らの観察力の乏しさを批判しつつ、ラスキンは自然の小さな要素から描き始めることを奨励する。気候変動の兆しに神の怒りを読み解く点にも特有の自然観が窺われる。

No. 29 ‖ ジョン・ラスキン著、E・T・クック、A・ウェダバーン編『19世紀の嵐雲（ラスキン全集ライブラリー版第34巻）、ジョージ・アレン社、ロングマンズ・グリーン社、1908年。ラスキンは1884年2月4日と11日に「19世紀の嵐雲」と題する講演を行った。ロンドン気象学会の会員でもあったラスキンは、半世紀にわたる空の観察に基づきイギリスの大気の状態の変化を指摘した。それは煤煙など産業化の弊害であると同時に、産業社会に生きる人間が失いつつある精神性の表れであると解釈した。早くも19世紀末に産業スモッグによる大気汚染を指摘した環境保護家ラスキンの主著である。

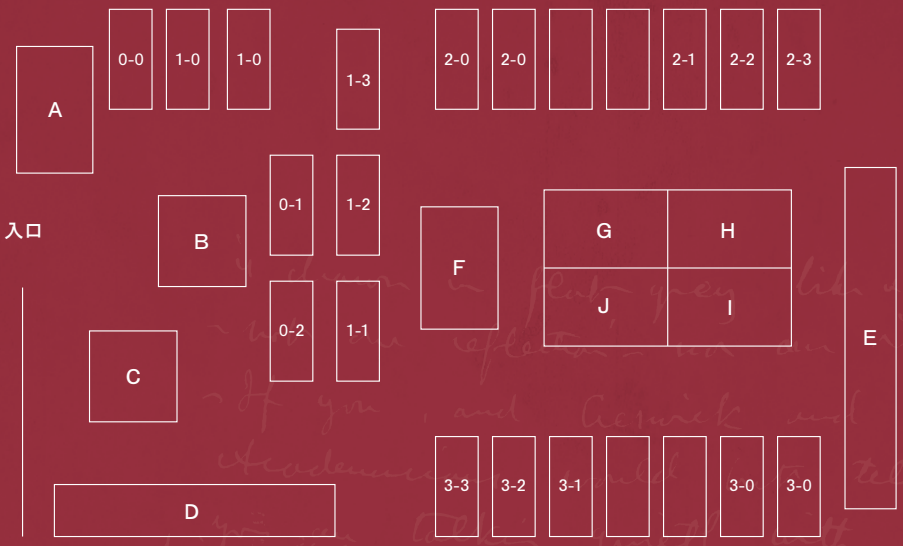
作品リスト・作品解説／三木はるか（日本女子大学）

作家名／書名・作品名／出版年・制作年／出版社／サイズ／技法

展示ケース	No.	
A	1	サミュエル・ロジャーズ著、J・M・W・ターナー原画、エドワード・グドール版刻『イタリア――詩集』挿絵「ヴェネツィア」／1830年 T・カデル社、E・モクソン社／205×148×40mm ／鋼版画
	2	ジョン・ラスキン著『サルセットとエレファンタ』／1839年／J・ヴィンセント社／195×120mm
	3	ジョン・ラスキン発サミュエル・パーマー宛書簡／1844年消印／226×181mm、ジョン・ラスキン画《葉の素描》／1844年／81×91mm 鉛筆・インク・白のグワッシュ・褐色の紙
B	4	ジョン・ラスキン画《シャフハウゼンの風景》／1863年あるいは1866年／135×215mm ／鉛筆・褐色のインク・水彩・不透明水彩・紙
	5	ジョン・ラスキン著・画《植物解剖図》／制作年不詳／134×213mm ／インク・紙
C	6	ジョン・ラスキン著、ウィリアム・モリス序文、ケルムスコット・プレス『ゴシックの本質』／1892年／ジョージ・アレン社／208×150×20mm ／木版
D	7	ジョン・ラスキン原画、G・ローゼンタール版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵9 《スティルティッド・アーキヴォルト（飾り迫縁）――カ・フォスカリ運河の廃墟から》／1887年／ジョージ・アレン社／434×636mm リトグラフに基づくフォトグラビュール
	8	ジョン・ラスキン原画、G・ローゼンタール版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵4 《コーニスのモールディング（刳型）――サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ聖堂の墓碑より》／1887年／ジョージ・アレン社／434×636mm リトグラフに基づくフォトグラビュール
	9	ジョン・ラスキン原画、G・ローゼンタール版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵3 《ビザンティン期の柱頭――トルチェッロの大聖堂とサン・マルコ大聖堂より》／1887年／ジョージ・アレン社／434×636mm リトグラフに基づくフォトグラビュール
	10	ジョン・ラスキン原画、T・S・ボーイズ、トマス・ルプトン版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵2 《アラビア風の窓――サンタ・マリア・マーテル・ドミニ広場より》／1887年／ジョージ・アレン社／434×636mm ／エッチング、メゾティント
E	11	ジョン・ラスキン原画、T・S・ボーイズ、トマス・ルプトン版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵6 《サン・マルコ大聖堂――南側のポルティコ》／1887年／ジョージ・アレン社／636×434mm ／エッチング、メゾティント
	12	ジョン・ラスキン原画、G・ローゼンタール版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵12 《扉口頭部1 モチェニーゴ邸の向かいの路地にて》／1887年／ジョージ・アレン社／636×434mm ／リトグラフに基づくフォトグラビュール
	13	ジョン・ラスキン原画、トマス・ルプトン版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵11 《扉口頭部　コンタリーニ邸「鉄の門」とサンタ・マルゲリータ広場から》／1887年／ジョージ・アレン社／636×434mm ／メゾティント
	14	ジョン・ラスキン原画、G・ローゼンタール版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵14 《ベルナルド・モチェニーゴ邸――窓の柱頭》／1887年／ジョージ・アレン社／636×434mm ／リトグラフに基づくフォトグラビュール
	15	ジョン・ラスキン原画、T・S・ボーイズ、S・レノルズ版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵1 《ドゥカーレ宮殿――第20番目の柱頭》／1887年／ジョージ・アレン社／636×434mm ／エッチング、メゾティント
	16	ジョン・ラスキン原画、G・ローゼンタール版刻『ヴェネツィア建築図集』挿絵15 《ドゥカーレ宮殿　ロッジア（柱廊）のルネサンス期の柱頭》／1887年／ジョージ・アレン社／636×434mm ／リトグラフに基づくフォトグラビュール
F	17	ジョン・ラスキン著、J・C・アーミテージ版刻『近代画家論』第3巻扉絵 《湖、大地、雲（コモ湖近傍）》／1856年／スミス・エルダー社／262×185×40mm ／鋼版画
	18	ジョン・ラスキン著『美術講義』校正原本（新改訂版と1910年版）／180×123×32mm
	19	ジョン・ラスキン著『ジョン・エヴァレット・ミレイ主要作品解説』序文の自筆原稿／1886年1月22日付／204×324mm
G	20	ジョン・ラスキン発クラークソン・スタンフィールド宛書簡／1859年8月22日付／273×214mm
	21	ジョン・ラスキン著『この最後の者にも』／1862年／スミス・エルダー社／170×110×19mm
	22	アドリアーノ・チェチオーニ《時の人、No. 40「理想の実現」》（雑誌『ヴァニティー・フェア』の挿絵版画）／1872年2月17日掲載／350×230mm リトグラフ
H	23	ジョン・ラスキン著『聖ジョージ・ギルドと聖ジョージ美術館』（ラスキン全集ライブラリー版第30巻）挿絵VII 「鉱石の標本」（上「めのうの構造を示す玉髄」、下「ブルートパーズと石英の結晶」）／1907年／ジョージ・アレン社、ロングマンズ・グリーン社 254×175×58mm ／写真に基づくフォトグラビュール
	24	J・H・ホワイトハウス編『聖ジョージ――バーミンガム・ラスキン協会雑誌』創刊号／1898年／ラスキン協会、エリオット・ストック社 227×178×26mm
I	25	ジョン・ラスキン著『フォルス・クラヴィゲラ――イギリスの労働者への書簡集』第1巻／1871年／ジョージ・アレン社／236×153×27mm
	26	ジョン・ラスキン発ロバート・チェスター宛書簡／1871年11月22日付／178×113mm
J	27	ジョン・ラスキン著『鷲の巣』（ラスキン全集ライブラリー版第22巻）挿絵XXII 《カワセミ》／1906年／ジョージ・アレン社、ロングマンズ・グリーン社／254×175×66mm ／素描に基づくフォトグラビュール
	28	ジョン・ラスキン発ダグラス・フレッシュフィールド宛書簡／1878年／214×134mm
	29	ジョン・ラスキン著・原画、J・D・クーパー版刻『19世紀の嵐雲』（ラスキン全集ライブラリー版第34巻）挿絵I 《アブヴィルの日没、1868年》《ブラントウッドの8月の空、1880年》／1908年／ジョージ・アレン社、ロングマンズ・グリーン社 254×175×64mm ／木版

A	1	Edward Goodall after J.M.W. Turner, *Venice*, steel engraving, from Samuel Rogers, *Italy, a Poem*, London: T. Cadell and E. Moxon, 1830.
	2	John Ruskin, *Salsette and Elephanta: A Prize Poem*, Oxford: J. Vincent, 1839.
	3	Autograph Letter from John Ruskin to Samuel Palmer, postmarked 1844. John Ruskin, *Drawing of Two Clusters of Leaves*, 1844, pencil, pen and ink, and white gouache on brown paper.
B	4	John Ruskin, *Schaffhausen*, 1863 or 1866, pencil, pen and brown ink, watercolour, and bodycolour on paper.
	5	John Ruskin, *Drawing of the Parts of Flowers*, not dated, pen and ink on paper.
C	6	John Ruskin, 'Preface' by William Morris, *The Nature of Gothic: A Chapter of The Stones of Venice*, Hammersmith: Kelmscott Press, London: George Allen, 1892.
D	7	G. Rosenthal after John Ruskin, 'Plate 9: Stilted Archivolts. From a Ruin in the Rio Di Ca' Foscari', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), photogravure from lithograph.
	8	G. Rosenthal after John Ruskin, 'Plate 4: Cornice Moulding. From a Tomb in the Church of SS. Giovanni E Paolo', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), photogravure from lithograph.
	9	G. Rosenthal after John Ruskin, 'Plate 3: Byzantine Capitals. From Torcello and Saint Mark's', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), photogravure from lithograph.
	10	T.S. Boys and Thomas Lupton after John Ruskin, 'Plate 2: Arabian Windows, in Campo Santa Maria Mater Domini', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), etching and mezzotint.
E	11	Thomas Lupton after John Ruskin, 'Plate 6: St. Mark's. Southern Portico', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), etching and mezzotint.
	12	G. Rosenthal after John Ruskin, 'Plate 12: Door Heads. 1. In Ramo Dirimpetto Mocenigo', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), photogravure from lithograph.
	13	Thomas Lupton after John Ruskin, 'Plate 11: Door Heads. From Ca' Contarini Porta di Ferro; and in Campo S. Margherita', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), mezzotint.
	14	G. Rosenthal after John Ruskin, 'Plate 14: Ca' Bernardo Mocenigo. Capital of Window Shafts', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), photogravure from lithograph.
	15	T.S. Boys and S. Reynolds after John Ruskin, 'Plate 1: The Ducal Palace. Twentieth Capital', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), etching and mezzotint.
	16	G. Rosenthal after John Ruskin, 'Plate 15: The Ducal Palace. Renaissance Capitals of the Loggia', from *Examples of the Architecture of Venice* (Orpington, Kent: George Allen, 1887), photogravure from lithograph.
F	17	J. C. Armytage after John Ruskin, 'Lake, Land, and Cloud (Near Como)', frontispiece of *Modern Painters* (Vol. 3, London: Smith, Elder, 1856), engraving.
	18	John Ruskin, Printed Proof of *Lectures on Art* (New and revised edition and 1910 edition).
	19	John Ruskin, Autograph Manuscript of 'Preface' to *Notes on Some of the Principal Pictures of Sir John Everett Millais* (London: William Reeves, 1886), 22 January 1886.
G	20	Autograph Letter from John Ruskin to Clarkson Stanfield, 22 August 1859.
	21	John Ruskin, *Unto this Last*, London: Smith, Elder, 1862.
	22	Adriano Cecioni, 'Men of the Day, No. 40: "The realization of the Ideal"', *Vanity Fair*, 17 February 1872, chromolithograph.
H	23	Plate VII: Specimens of Minerals (above: 'Chalcedony Exhibiting Agate Structure'; below: 'Crystals of Blue Topaz in Association with Quartz'), Photogravure from Photographs, from John Ruskin, *The Guild and Museum of St. George*, in E.T. Cook and A. Wedderburn eds, *The Works of John Ruskin*, Vol. 30, Library Edition, London: George Allen; New York: Longmans, Green, 1907.
	24	J. H. Whitehouse ed., *Saint George: The Journal of the Ruskin Society of Birmingham*, Vol. 1, 1898.
I	25	John Ruskin, *Fors Clavigera: Letters to the Workmen and Labourers of Great Britain*, Orpington, Kent: George Allen, 1871.
	26	Autograph Letter from John Ruskin to Robert Chester, 22 November 1871.
J	27	John Ruskin, 'Plate XXII: The Kingfisher', photogravure from a drawing by Ruskin, from *The Eagle's Nest*, in E.T. Cook and A. Wedderburn eds, *The Works of John Ruskin*, Vol. 22, Library Edition, London: George Allen; New York: Longmans, Green, 1906.
	28	Autograph Letter from John Ruskin to Douglas Freshfield, 1878.
	29	J.D. Cooper after John Ruskin, 'above: Plate I (Fig. 1) A Sunset at Abbeville, 1868; below: Plate I (Fig 2) An August Sky at Brantwood, 1880', wood engraving, from John Ruskin, *The Storm-Cloud of the Nineteenth Century*, in E.T. Cook and A. Wedderburn eds, *The Works of John Ruskin*, Vol. 34, Library Edition, London: George Allen; New York: Longmans, Green, 1908.

［会場構成］



0-0 趣旨説明
0-1 ラスキン肖像（若）
0-2 ラスキン肖像（老）

1-0 ラスキン多面体
1-0 ラスキン年表
1-1 美術批評家ラスキン
1-2 社会改良家ラスキン
1-3 環境保護家ラスキン

2-0 聖ジョージ・ギルド
2-0 ギルド年表
2-1 ギルドの文化活動
2-2 ギルドの社会活動
2-3 ギルドの環境活動

3-0 コミュニティ実践
3-0 年表
3-1 露木コレクション
3-2 みんなでつくる
3-3 自然にいだかれて

展示ケース	作品No.		展示ケース	作品No.	
A	1	イタリア	E	11–16	ヴェネツィア建築図集
	2	サルセットとエレファンタ	F	17	近代画家論
	3	パーマー宛書簡		18	美術講義
B	4	シャフハウゼンの風景		19	ミレイ解説序文
	5	植物解剖図	G	20	鉄道書簡
C	6	ゴシックの本質		21	この最後の者にも
D	7–10	ヴェネツィア建築図集		22	時の人ラスキン
H	23	聖ジョージ美術館			
	24	聖ジョージ協会誌			
I	25	労働者への書簡集			
	26	チェスター宛書簡			
J	27	カワセミ図			
	28	環境書簡			
	29	19世紀の嵐雲			

大阪ラスキン・モリスセンター収蔵品による企画展

今に生きるラスキン

期間：2024年9月20日｜金｜～10月20日｜日｜
時間：10:30～17:00
月曜・祝日休業
入場無料

イベント：10月6日｜日｜
トークイベント（午前）・展覧会ツアー（午後）
詳しくは大阪大学中之島芸術センターのホームページにて
お知らせします。https://www.art.osaka-u.ac.jp

主催：大阪大学中之島芸術センター
協力：大阪ラスキン・モリスセンター、studio-L

問い合わせ：大阪大学中之島芸術センター事務局
secretary.art@ml.office.osaka-u.ac.jp

会場：大阪大学中之島センター 4階展示室
〒530-0005 大阪府大阪市北区中之島4丁目3-53

※大阪大学中之島センターの正面玄関は中之島通に面しております。
10階建ての最上階がガラス張りで薄緑色に見える建物が大阪大学中之島センターです。

Exhibition Featuring the Collection
of the Ruskin & Morris Center of Osaka

Ruskin Alive

Duration: Friday, 20 September 2024 to Sunday, 20 October 2024
(Closed on Mondays and holidays)
Time: 10:30 AM – 5:00 PM
Location: 4th Floor Gallery, Osaka University Nakanoshima Center
4-3-53 Nakanoshima, Kita-ku, Osaka-shi,
Osaka 530-0005 Japan
Admission: Free
Organised by: Osaka University Nakanoshima Art Center
In Cooperation with: The Ruskin & Morris Center of Osaka, studio-L
Contact: Osaka University Nakanoshima Art Center
secretary.art@ml.office.osaka-u.ac.jp

◎京阪中之島線 中之島駅より徒歩約5分
◎阪神本線 福島駅より徒歩約9分
◎JR東西線 新福島駅より徒歩約9分
◎JR環状線 福島駅より徒歩約12分
◎地下鉄四つ橋線 肥後橋駅より徒歩約10分
◎地下鉄御堂筋線 淀屋橋駅より徒歩約16分